かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

みんな集合！
（大教会長杯スポーツ大会 5.19 茂平グランドにて）

教祖１３０年祭に向かって

三年千日　**さあ！　おたすけ**

祈る　動く　つなぐ

立教176年
6月号

一人でも多く よふぼくに育てよう

縦の伝道講習会開催　5月21日

少年会

少年会笠岡団（武内正美団長）は5月21日、加藤元一郎先生（少年会本部委員・仙臺大教会長）を講師に迎え、大教会5月月次祭後に「縦の伝道講習会」を開催。役員、部内教会長、よふぼく、信者ら多数が受講した。

講習会を通し縦の伝道が教会活動の源となるよう開かれたもの。同団として年祭活動1年目の本年、こどもおぢばがえり1千500人の帰参と全隊からの参加を目標に、そして初参加者募集に力を入れている。

加藤先生は、少年会本部の活動方針を基に自身の体験を通し「まず私達育成者がこどもおぢばがえり、教会おとまり会などを通して、日々の通り方、またひのきしんを心がけ、その態度を子供達に映す努力をし、関わっている子供達を一人でも多く育て、信仰の喜びを伝えていこう」と話された。講話要旨は次の通り。

縦の伝道の大切さを話される加藤先生

◎信仰の喜び

信仰の喜びを伝えるという事はどういうものなのでしょうか。喜びという事に関して、信仰をしている私達と、信仰をされていない方々にはどんな違いがあるのでしょうか。

例えば子供の成績が上がった、また健康が維持出来たとすると、それは学校、塾のお陰、医者、健康食品のお陰という事にもなります。しかし信仰的に考えると、子供が学校に塾に元気で行き、帰って来る。また注射を受け入れ、薬や健康食品が飲めるという事も最終的には神様のお働きという事になる。

テレビのニュース、新聞記事の中で、子供の命に関わる事故、事件が後をたちません。ある日、詰所（仙臺）の前で遊んでいた子供が車にはねられた。幸い大事には至りませんでしたが、この時、子供を守るという事はどういう事だろうと思った。守っているつもりでも本当に守りきれているだろうか。心配だからと毎日、後をついて行く事は出来ません。当たり前の様に一日を過ごさせて頂いているが、矢張り親神様に守られている今なんだと、事故を通して思った。

親神様のお陰という

＜実行目標＞人のたすけを願いましょう

おたすけ・お願いカード 集計：7，695枚

平成２５年４月２１日～５月２０日

平成２５年累計：18，072枚

事を、子供達に伝えていくにはいくつか大事な角目、ポイントがある。親神様・教祖のご存在が分からなければならない。信じる心がなければお陰とならない。信仰の喜びを伝えるには、まず私達育成者が信じる事をしなければならない。

◎信念を持って子供達と向き合う

ある年の少年会年頭幹部会の席上、真柱様は「自分たちが関わっている子供達を一人でも多く、将来、道のために働くよふぼくに育てるんだという気持ちを忘れずに少年会活動をして頂きたい」と話された。

私自身、教会子弟をはじめ教会に繋がるよふぼく、信者の家庭まで皆、この道を継いでくれたらいいと思う。しかし何でも自由な時代に、本人の意志や親の考えもあるから、絶対によふぼくに育って欲しいという気持ちを持っていたかどうか、反省するのです。何としても信仰を伝えて、よふぼくになって欲しいという思いを子供達に伝えるには、親自身がその気持ちをしっかりと持つと同時に、幸せに繋がる確かな道は、教祖がお教え下されたこの道だけだという信念を持って、子供達と向き合う事が大事だと思う。

◎人間は環境の動物

少年会の活動方針は「ひのきしんの態度を映し、教えを実行する子供を育てよう」です。家庭、教会、支部などいろんな活動を通して、子供に大人、親のひのきしんの態度、信仰の喜びを映して、子供達が教えを素直に実践していくための基盤作りをさせてもらおうというものです。

人間は環境の動物といわれます。人格、考え方も環境に影響されるというのです。具体的には子供を取り巻く環境です。

私は少年会発行の「さんさい」誌の編集に携わっている関係で、教育専門家にお会いする機会がよくあります。ある号の特集が「勉強が出来る子になるためには」でした。どうしたらいいですかと尋ねると「勉強が出来る子は、出来る環境があるから出来るんだ」という答えでした。

例えばオリンピックに出場する様な選手の親は、得てしてスポーツが好きだったり、習わす事に熱心です。本人の潜在的な能力はいうまでもないが出来る環境が整っています。育てるには、その環境が必要です。

ではどんな環境がいいのか。具体的には子供に何を見せ、何を聞かせるかだと思う。子供達は見る物を録画し、聞く事を自然に録音しています。そして一度、録画、録音された物はなかなか消えませんし、成長にも影響します。

また体験するという事も影響します。実際に行う直接体験と、話をしたりテレビを見たりする間接体験があります。野球のホームランを打つ理屈を知っていても、打つ練習を実際にしなければ打てません。知識を得て、実際に行う。どちらも大事だから両方させなさいと先生は話された。

◎おぢばがえりの大切さ

この話を聞いて、子供達に信仰を伝える体験の場として絶好の所があると思った。教会です。信仰を育む上での機会、体験です。そして最高に大切な場はおぢばです。信仰の喜びを伝える上に、おぢばがえりは欠かせないものです。

少年会本部では、今年のこどもおぢばがえりに関して二つの事を強調しています。一つは全教会、全隊からの帰参で、もう一つは初参加者の募集です。私達と親神様・教祖を繋いでいるのが教会です。全国の教会で参加の声をかけて頂き、親神様と子供達を繋ぐ役割をおぢばがえりで実践して頂きたいのです。

◎伝える努力

おぢばや教会、また少年会活動などで神様の話を伝えても、家に帰り「神様なんかいる訳がない」となったら大変です。家庭での私達、親と子供の向き合い方が大事になります。信仰をどの様に伝えていったらいいのか。具体的に教祖のひながたとして教祖伝の中にお残し下さっていますが、親

として子供達に神様のありがたさ、ご守護を一生懸命伝える努力をしなければならないと思う。

◎喜び探し

娘の身上を通してお教え頂いた事があります。身体の半分が動かないのです。診察の結果、重い原因と軽い原因があるという。親としてはどうしても重い方を想像します。「どうしてうちの子が」と喜べない、勇めない日が続きました。

ある時、まさ奥様（前真柱様夫人）に相談しました。奥様は数時間、私の愚痴を聞いて下さいました。最後に「今、加藤君の心はガラスが曇っている様なものよ。一時曇っているだけだから、それを拭いて周りをよく見てごらん。親神様があなたの回りに喜べる事を沢山用意して下さっているよ。それは小さくて探せないかも知れない。でも一生懸命探してごらん。必ず見つかるから。夫婦で喜び探しをしなさい」とお諭し下さいました。夫婦で話し合い、喜び探しをしました。娘の身上は検査の結果、軽い方の原因でした。これは私の宝であり、信仰の大事な角目だと思います。

子供の幸せを願わない親はいません。しかし人生は楽しく、嬉しく、喜べる事ばかりではありません。どんな中でもありがたいな、勿体ないなという心を、歯を食いしばってでも、握り拳握ってでも味わわせてもらい感じさせて頂く。この努力が子供達に映っていくんだと思うのです。

信仰をしていても、神様の事を不足ばかりしていたら、子供は「そんなに文句ばかり言うんだったら、僕は信仰しない」と言ってしまうのは当然だろうと思う。

家庭、教会、おとまり会、おぢばがえりを通して、ひのきしんの態度を映し、立派なよふぼくを育てる御用に携わらせて頂きたいと思います。

ソフトボールで親睦深め

第7回 大教会長杯 親睦スポーツ大会 開催

5月19日、第7回大教会長杯親睦スポーツ大会が開催され、120人が参加した。3年振りの開催となった今回も、天候が心配される大会となった。雨天でなければソフトボール、雨天時はソフトミニバレーという事で準備を進めてきたが、この日は、茂平グラウンドでソフトボールを行った。

試合は、まず3チームずつ2会場に分かれて、総当たり戦を行い、その後、各会場の同一順位同士が対戦し、最終順位を決める方法で進んだ。

1試合目の途中より、雨が降り始めたが、どの試合も会長さん、女性、少年会員、青年会員などが溌剌としたプレーを見せ、白熱したものとなった。

また、昼食には、婦人会による美味しいカレーが振る舞われ、雨で肌寒い中、身体を温める事ができた。午後からの試合は、雨が激しくなったため中止とし、代わりに各チーム9人の代表によるジャンケンで、最終順位決定戦とした。

その結果、久松チームが初優勝に輝き、以下、2位が福山、3位高屋、大教会長賞に直轄Cとなった。

途中で中止となったものの、子どもから大人まで、同じ笠岡につながる教友同士の親睦が深まった、和やかな一日となった。

雨の中、気迫あふれるプレー続出

婦人会の方々の真心こもったカレー
おいしかった

にをいがけ in 広島平和記念公園

5・23

海外部

海外部（上原志郎部長）では、5月23日（木）広島平和記念公園で、日本を訪れている外国人に対して「にをいがけ」を行いました。これは、海外伝道に携わらせていただく理づくりとして始まったもので、今回で3回目。参加した海外部員5名は、園内で「よろづよ八首」をつとめ、その後2つに分かれて「英文パンフレット」を配布しました。平和学習で園内を大勢の小・中学生が訪れている中、パンフレットを受け取ってくれた人は約80人。出身地はアメリカ・スペイン・フランス・オーストラリア・ニュージーランド・インド・ケニア等など、多くの国から来られていました。昨日日本にやって来たというスペインのカップルは、広島は以前からずっと訪れたかった場所で、今後は京都・奈良・箱根・東京などを訪問する予定だと話してくれました。明治23年9月30日の『おさしづ』に「心から真実蒔いた種は埋ってある」とありますが、この度海外部員が蒔いた種が、旬が来て、いつかどこか（外国）で発芽してくれたらいいなーと思います

（海外部副部長　吉岡　誠一郎）

海外部）　風薫る平和公園の一角にて

全員野球で予選を突破！

全教野球大会

笠岡ワールドブラザーズ

笠岡ワールドブラザース（北川勇治監督）は、5月25日、親里・白川球場で行われた全教野球大会・第40回記念大会予選（本部布教部主催）に出場した。

小田原分教会（嶽東大）との初戦は投打に圧倒し打などで突き放し、7―4で勝ち、同チーム持ち前の全員野球で予選と突破、10月25日からの本大会への出場権を得た。

40回目を迎えた本大会には全国から100チームが参加。3月から6月まで予選の全試合を親里で行っている。

同チームは本大会（10月26日、第1試合）で、4年前の優勝チーム本島大教会と対戦する。

長年同チームの指揮を執ってきた平盛秀年監督が勇退、新たに北川勇治氏（稲倉分）が監督に就任した。

ワールドブラザーズ）参拝を終え、いざ出陣！

21―3で大勝。続く2試合目は同大会常連の小南部大教会。序盤に両チームとも2点を取り2―2で接戦に。しかし連投の枝廣大樹（東福山分）が追加点を許さない好投、さらに岡秀明（上父分）の適時

おたすけ心を養おう

別席ひのきしん団参実施

25日―26日

布教部

布教部（田中隆之部長）は5月25、26日の両日「別席ひのきしん団参」を実施、土曜、日曜ということもあり1泊2日、また日帰り団体、個人参加などを含め延べ814人（布教部調べ・別席者含む）が参加した。

真夏を思わせる暑さの中、ひのきしんに汗を流した

大教会の年祭活動実行目標「さあ！おたすけ」また「おたすけカード」を通しておたすけ心を養い、一人でも多くの人をお誘いしておぢばに帰らせて頂こうと行われたもの。

25日、午後1時から東礼拝場で各ブロックごとのプラカード前に参加者が集合、拍子木を入れておつとめをつとめた。

その後、西境内地・第三御用場西側広場で約1時間、除草ひのきしんに汗を流した。

午後4時半から詰所北棟3階講堂で、講師に増田正義先生（典日分教会長）を迎え「おかえり講話」を行った。

物事の受け取り方について話される増田先生

先生は、自身の青年時代、奥様の出直しなどの体験を通し「物事の基準によって考え方が変わってくる。物の見方が変われば見る事が変わってくる。基準を喜び捜し、喜ぶ努力とすれば、どんな悲しみの中からも多くの喜びを見つける事が出来る」と人間の幸せは人の姿、形にあるのではなく、それぞれの心のあり方にあると話された。

そして「教祖のひながたは、どんな状況の中でも喜びを出せる心で、この心を私達は学ばなければならない。さらに、どんな条件の中でも幸せを感じる事が出来、人の喜ぶ姿を見て自分も喜べる事、これが成人した姿で、年祭活動を通して成人した姿を教祖にご覧頂きたい」と私達の歩み方を約1時間話された。

26日は本部6月月次祭参拝、別席などが行われた。

田中同部長は「参加目標1千人と打ち出してつとめさせて頂いたが、その数に及ばなかった。年祭活動2年目、3年目となる来年、再来年に向け教会長がよふぼくを牽引する先導車となり、旗振り役として旬の追い風を頂きたすけ一条に邁進させて頂きたい」と反省、抱負を話した。

別席関係は次の通り。

○初席―2人 ○中席―16人 ○授訓―1人。

親の声を 素直に受けよう

委員部長講習会開催　6月1日

婦人会

婦人会笠岡支部（上原きよ子支部長）は6月1日、大教会講堂で委員部長講習会を開催、同支部委員、委員部長105人（受付数）が参加した。

教祖130年祭に向けての歩み出しの本年、本会の活動方針の徹底と委員部長の親睦を深めるため行われた。

上原きよ子同支部長は「親という立場からおかけ頂く言葉は、たとえ出来ないだろうなと思える事でも、まず『はい』と素直に受ける事が第一だと思います。そして実行出来る様にそれぞれの立場で、誠真実込めて苦心する事が大事です。結果は神様がつけて下さいます。教会につながる皆さんに育って頂く手助けをしていく事が私達の役目です」とあいさつ。

引き続き、三宅和子先生（郡山大部属・鴨分教会委員部長）の講話が約1時間あった。

先生は、自身の教会での体験を基に、心遣い、声のかけ方は物事の種として、

○喜びの感じられない言葉、切れてしまう言葉は遣わない。

○人に気を遣わせない。怒らない。いつも笑顔で不機嫌な表情を顔に出さない。

○縁あってつながった方には、家族のつもりで付き合う。

○陽気ぐらしに必要なためのユーモアのセンスを磨く。

○信者さんが気を遣う様な教会であってはならない

―など、教会の夫人として、また女性として日々目標としている通り方を話された。

そして「教祖130年祭に向かうこの旬に、赤や、黄色の花と共に、なる程の人という花を咲き誇らせて私達、婦人会員は夢を持つ集まり目指して、明るく笑顔でこの道を求めたい。過去を振り返るのではなく、今、生かされている事、今のご守護に感動し、喜び、それを生活の中に取り入れていけるお互いにならせて頂ける様、頑張りましょう」と結ばれた。

昼食後、講堂でアトラクションが行われ、各ブロックごとの趣向を凝らした出し物が次々にステージに登場、会場は終始、笑い声に包まれていた。

活動方針の徹底、委員部長の役目の再確認をすると共に、親睦を深め閉会した。

アトラクションでの各ブロックの出し物は次の通り。

○東ブロック「寸劇」○西ブロック「フラダンス」○福山ブロック「盆踊り」○高屋ブロック「寸劇・歌」○島根ブロック「コーラス」○上下・府中市ブロック「歌・踊り」○支部委員「十全のご守護」

次々と繰り出される出し物（西ブロック・フラダンス）

温故知新

いきいきエピソード 25

思えば数々の御守護

昭和16年の暮れには日米開戦となり、しだいに戦争が熾烈になってきて、米国の潜水艦が東シナ海で、日本の商船を手当たりしだい撃沈するようになって、船がなくなってしまった。その頃日本では砂糖がなくなった。台湾から船に積んで送るが、途中で沈められて皆、海の中へ溶けてしまってる。あまり砂糖船が沈められるものやから、東シナ海の水も大分甘くなってるんやないかと、ちょっと嘗めてみたが、やっぱり塩辛かった。

そういう事で、一月、四月、十月とおぢばへ帰らせて貰うときには、電報も打てない。台湾の基隆（キールン）の港で乗船したら、いつ門司へ着くかわからん。

はじめは四十八時間で、一万トン級の船が通っておりました。昭和十七年からは、そんな大きな船は行かなくなった。しかも、三日が一週間や十日とかかる。それは一隻でなく五隻十隻と船団を組んで、前後を駆逐艦が護衛していく。船団の中には、一時間に十マイルのと十五マイル行く船とあるから、遅い方に足を合わせます。しかも真っ直ぐには進まないで、ジグザグに航行する。港を出入りする時、汽笛が鳴らず、途中で鳴る。一度鳴ったら警戒警報、潜水艦が近くにおるので、いつ撃沈されるか分からん。荷物はほっておいて船室の外に並んでじっと待っておる。解除になるか、襲撃の汽笛が鳴るか、その時間の長い事。攻撃を受けたら、甲板へ出て、いよいよとなったら、ボートを降ろす。乗り切れない者は海に飛び込む。だから船に乗るには、七ツ道具がいります。その中四ツはぜひ持たねばなりません。笛、綱、ナイフと名札。沈められてもボートに乗れればいいが、乗れなかったら、板きれかブイにつかまって、自分の体をそれに結びつけて、浮いていなければならない。それで救助の船がきたら、自分の居所を知らせるために、笛を吹く。助けて貰えたら、体を結んでいた綱が水ぼてになっているから、ナイフで切る。不幸にして助けて貰えず、力尽きて死んだら、波に漂う死体を誰かが拾ってくれた時に、名札が役に立つ。

昭和十七年以来、私は本部から帰参するように言われて十一度航海しましたが、一度も潜水艦に遭った事はありません。これも親神様のお陰と常に御礼申して通らせて頂きました。

十八年には婦人会、青年会とよのもと会が発展的解消して、一宇会になりました。台湾にも一宇会台湾委員会ができまして、海を隔てた福建省アモイの教会では、その支部の初会式するから庁長においで頂きたいと、領事の証明書を同封して頼んできました。早速渡航手続きをとりましたが、一週間くらいで許可が出るはずなのに、十日経っても二十日経っても許可がおりない。尋ねても、しばらく待って下さいというだけで許可がない。

そのうちに日が迫ってアモイから迎えの人が来てくれた。それで、その船は明後日にアモイに行くと言います。しかし許可が出なくて渡航できないからと、その人に先に帰ってもらいました。

ところが、その船がアモイの港外で潜水艦にやられて、迎えの人は行方不明となった。アモイの教会では私も一所に乗っていたのではないかと心配して伝道庁へ電報をよこしてきました。

昭和十八年一月大祭に、おぢばに帰るために伝道庁の一月大祭を勤めてから帰ったのでは間に合わないので、郵船の支店に十二月の暮れに

出る船はないかと尋ねたところ、「あるけれども小さくて船足の遅い船です。一月になったら、いつもの大きい船が出ますが」との事でしたが、どうでも年内にと思ってその小さい船で帰りました。十日あまりかかって門司に着きおぢばへ帰り御用を済ませました。笠岡への途中、神戸の郵船へ寄って大祭が済んだらすぐ台湾へ行くとの予定で二月はじめの船の予約しておきました。ところが一月の大祭に郵船から手紙が来て、「当社の台湾航路の船はなくなりました。他社へお申し込み願います」との事です。やむなく商船へ連絡しましたが、こちらも返事が芳しくない。事情を聞きますと、郵船の富士丸、加茂丸、商船会社の船の三隻が一緒に出たが、加茂丸、富士丸は沈没、商船の船はスクリューの一部に魚雷が当たったものの、何とか航行できたという事でした。

こういう事でその時台湾へ行くのには骨が折れました。二月二十六日商船会社のチャーター便が台湾へ行くというので、やっとそれで行けたのですが、出掛ける時海外伝道部長さんに、「今から台湾へ参りますが、伝道庁の用事では、もうよう帰りません。伝道庁長の更迭というような事があるんでしょうか。本部の御用なら帰りますが、御承知下さい」とお暇乞いをして行きました。

ところが四月二十六日の事です。常夏ですから、伝道庁には、いつも草が生えて仕方がない。一カ月に一度は草取りをする。午前中草取りをして午後お話の勉強会で、それを聞いているところへ電報がきた。

それは、「本部詰所詰命ず、後任庁長三浦政太郎」本部から帰って来いとの事です。そこで私は一生懸命やらせてもらっているのに、何故こういう電報が来るのかと考えましたが、ようやく思案して、これでよかったと思いました。五年おります間には、伝道庁の負債をみな返金し、その上剰余金まで出来て整理済み、その他外部のご用もあったが、届かんなりに勤めさせてもらった。これでよかった、もう用事は済んだから、台湾から引き揚げたらよかろうと、神様からのお褒めの電報や。有り難うございますとの心になりまして、早速船の手配をしましたら、内地へ帰り切りの人なら乗せますが、旅行の人はいけませんという事で、どうやら十日程かかって、無事門司に着いて帰らせてもらう事ができました。これも神様のお陰であります。

十一回往復する中に、これがお道でなかったら、こんなにまでして渡海しないと何度思ったか分かりません。お金を貰ったり商売するのなら、御免こうむります。神様の御用だからやらせてもらった。

お道の中では命がけという事をよく言われる。命がけみたいなものは、ほん何でもない事です。帽子掛に帽子を掛けたようなものです。はずしたらそれでしまいです。当時の台湾航路の船は乗ったら着くまでどうなるやら分かりません。途中寄港する所も避難する場所もなし、潜水艦にやられたら、それで終わりです。ちょうど命を嵌（はめ）込んだようなものです。

お道も命がけの仕事ではまだいけません。命を嵌め込んだ真剣な仕事をさせて貰わにゃいけません。命を嵌め込んでつとめてこそ、本当の御用ができるんだと、しみじみ思って通らせて頂きました。その中に常に先廻りの御守護を頂いています。

いよいよ教祖九十年祭への働きの最後の年を迎えます。皆さん方は一年目二年目と懸命にお働き下さったと思います。今度は更に一層のつとめに、命を嵌め込んだ働きをさせて頂かんならん時ではないかと思います。どうぞ宜しくお願い致します。（完）

22で昭和五十年十二月の大教会神殿講話と書きましたが、昭和四十九年十二月の講話です。訂正いたします。

（前史料部長）

修養科修了生の声

二度の修養科で改めて心定めをした事

八尋分教会　末永　裕

最初の「二度目の修養科」をたどって見ますと、約12年前に四十二齢で突然クモ膜下出血で倒れた事でした。倒れた時点で既に意識は全く無く救急車で病院に運ばれましたが、家族は医師から呼ばれ「命は99・9％無いと思って下さい。もし救かっても植物人間が精一杯です」と言い渡されたとの事です。しかし、ここでも大きなご守護を頂き本来であれば約八年以上「おぢば」でお仕込み頂いたものを思い出すハズの「お道」を忘れていました。身体が自由に動かず又、働く事もなかなか出来ず10年近くイライラするばかりの人生でした。その間も特に家内には暴力こそありませんでしたがいわゆる「言葉の刃物」で傷つけていたと思います。ただ、どうしてもフッとおやさま……親神様……だけは不思議と頭に浮かび拝をさせて頂き「おつとめ」をさせて頂いていました。そんな中、約二年半前に社長をやって欲しいとの話しが出て来たので「解りました」とすぐ了解をしたのですが、一年半程は上手く仕事も進み家内も喜んでいました。処が、昨年九～十月頃から急変し会社の会長に上手くだまされた様な形の事情が起き自分の家内の仲も冷たくなりました。この時四人の子供達が「お父さん、二回目だけど修養科に行った方が良い！」と言ってくれ自分なりに悩みましたが二度目の修養科を決心しました。

最初に今回の修養科で感じたのは当然知ってはいましたが一度目の修養科は詰所普請の真真中で忙しくしまた自分も年齢が若かったので覚えるのが非常に早かったと思います。処がクモ膜下出血の身上を頂き右半身の障害や頭の回転が非常に遅く正直一ヶ月目は悩みました。「おてふり」でも境内掛に居た頃は目を閉じても出来ていたものがなんとなくしか出来ず「おぢば」から離れ練習→人様の為→親神様、おやさまに喜んで頂いていなかった結果が出ていると思いました。

考えてみますと三ヶ月目の渡邉先生の前会長様からも「修養科は本当の修養＝人様を救けさせて頂く方法を教えて頂く場。だから修養科を出た後が大切だよ」と言って頂いた事を覚えています。全く同じ内容の事を修養科主任の中山先生も何度も講話でもお話しされていました。また「おさづけ」も何度も何度も使わせて頂かないと全く意味はない、絵に描いた物にしてはならない等大切なお話しも聞かせて頂き改めて自分は修養科が終了した後が、親神様、おやさまに本当に喜んで頂ける場なので二度目の修養科を大切にして実行実践させて頂きます。そして森本先生、竹本先生、雑賀先生、渡邉先生また詰所の各先生や月次祭等忙しい時においで下さいました先生、奥様三ヶ月有り難うございました。

思い出になる三ヶ月

三郡分教会　谷本　裕太

私が修養科を志望したのは、事情があったので志願しました。始めは、三ヶ月間やっていけるかが不安でたまりませんでした。なぜかと言うと集団生活に慣れていなかったので夜も中々寝れない日がありました。少しずつ詰所生活に慣れてきて詰所で自己紹介の時に色々な事や身上で悩んでいる方がいるんだなっと思いました。でもひとり一人個性のある方達だと思いました。詰所で鳴り物や、おてふりの学びで大半の人ができるので、凄く焦りました。私は、おてふりが全くできない状態でしたので一から覚えなければと努力をする事を決意を心定めをし一ヶ月目は、教養の先生は、海松ヶ岡分教会長森本先生は、三ヶ月間教養の先生で、凄くやさしく面白い先生だなって思いました。助員の先生は、福芦分教会会長竹本先生は、

凄くやさしい先生で色々なことをしていて感心しました。おてふりも二人の先生丁寧でわかりやすく教えていただいたのがあって六下りまで覚えることができました。学校では、昼のまなびも積極的に出ることもできました。二ヶ月の助員の先生は、照雲分教会会長雑賀先生でした。面白い先生でバルーンアートがうまく作る先生でおてふりもわかりやすく教えていただきました。三ヶ月目私の誕生日がありまして、修養科生の皆と森本先生雑賀先生が祝っていただきました。まさか誕生日会をしていただけるとは思わず嬉しかったです。二ヶ月目は、十二下り目までおてふりを覚えることができ、感激でした。学校でようやく昼のまなびで、月～土までのまなびができることができ、これも同じ修養科生の皆が練習をつきあってくれたから、覚えることができました。本当感謝しています。三ヶ月目は、品治分教会会長渡邉先生に教えていただきました。渡邉先生は、やさしく面白く修養科生活を盛り上げてくださいました。三ヶ月目は、私は、よふぼくでなかったので三ヶ月目で念願のよふぼくになることができました。よふぼくになった以上色々な方におさづけを取り次ぎをしていきたいです。おさづけをいただいて、大事にとっとく人ではなく、使うことが大切と教えていただきました。最後になりましたが、森本先生には、色々な悩みにアドバイスをいただいて感謝です。少し前に、教人検定の講習を受けたいと思い相談すると詰所の主任先生に相談をしていただいて、凄く嬉しかったです。森本先生が教養主任で本当に良かったです。私が色々な相談すると自分のことのように思ってくれる先生を尊敬しました。森本先生・竹本先生・雑賀先生・渡邉先生・修養科生・らっさん・末永さん・丸ちゃん・三輪さん・まいちゃん本当に修養科を一緒に修了できたことが悔いのない生活ができました。今の気持ちを忘れないように今後の生活に活かしていきたいです。笠岡863期の皆本当にありがとうございました。

修養科3ヶ月間の思い出

瑞雲分教会　西村靖彦

私は、過去におぢばで11年間お世話になっていたこともあり修養科を端から見ていて楽に通れると思っていました。いざ、始まってみると、一番組係の御命を頂き、詰所でもクラスでも自分が引っ張っていかねば、との思いが強すぎて、無理をして周りに迷惑をかけたりしていました。教養掛の森本先生より「今のままでは、三ヶ月持たない。もう少し楽にしたら」とお言葉を頂き、少し力を抜いたら、周りも見えてくる様になり、落ち着いて行動できる様になったと思います。そうしてくると、組係として何ができるのか、と色々と考えると、自分が表に出るのではなく、皆が勇んでできる様にムードメーカーをさせて頂くのがベストではないか、と思いました。そんなことを考えながら、2ヶ月目を迎えると、今度は周りのことが、気になり過ぎて、我を出してしまい、些細なことで喧嘩してしまいました。そんなときに担任の先生から、「そんな大人げないことをするなんて、西村君らしくない」と言われ、自分がこうまんだったと反省させて頂き、何とか仲直りさせて頂くことができました。このとき、修養科に入る前に自教会の会長様より言われた言葉を思い出しました。「頭を低くして通りなさい」この言葉を忘れずに通らなければ、と思いました。こうして、振り返ってみて思い出すのが、暇さえあれば、回廊拭きをさせて頂こう、と最初から心定めさせて頂きました。ずっと続けさせて頂いていると、仲間が沢山できたり、回廊拭きをさせて頂いている時に色々と思案させて頂き、心を落ち着けさせることができたり、本当に勇んでつとめさせて頂けたので良かったと思います。また、組係同士でも仲良くなり、お互いに支え合って悩み事を解決したりできて、これもまた、いい勉強になったと思いました。また、クラスでは、始めの頃は少し浮いていたのですが、そのうち皆から、「組長」と親しく呼ばれるようになり、段々、クラスも一

体感がでてきていい感じになってきました。それと昼休みのてをどりまなびも、ずっと参加させて頂いていました。ある方から、「朝礼台に昇ってをどりをしたら」との声掛けがあり、つとめさせて頂いたところ、参加されている皆さんから、喜んで頂いてつとめさせて頂いて良かったと思いました。これもいい思い出でしたが、一番はやはり、修了式の答辞をつとめさせて頂けたことです。読ませて頂いたときには、感極まって言葉に詰まることもありましたが、何とかつとめさせて頂くことができました。本当にこの三ヶ月は、内容が濃く、色々と学ぶことができました。熱い思いを持てば、周りを動かすことができること、低い心で通らせて頂くことの大切さを感じました。教祖百三十年祭三年千日のこの時旬に、修養科を修了させて頂けた喜びを胸に、今後、勇み心を忘れずにしっかりつとめさせて頂きたいと思います。最後に教養掛の先生方、詰所の先生方、三ヶ月間大変お世話になりありがとうございました。

修養科生活三ヶ月通して

木津和分教会　丸山　優樹

修養科生活三ヶ月を通して今、改めて感じたことは二つあります。

一つ目は教祖や先人の方々の御苦労を改めて感じたことです。修養科の方々も講師の先生方から教典や御伝を通して教祖のひながたを学ばせて頂きました。特に御伝ではどんなことでも喜び勇んで通られた教祖のことを考えると「すごいなあ」とただただ思うだけでした。「こんな時、教祖なら……」と考える中で喜ぶことの大切さを学ばせて頂きました。どんな中でも勇んで通られた姿は想像するだけで自分が元気になってくるのは教祖からいただく力なのでしょう。教祖が御高齢にも拘わらず、何度も警察へと連れて行かれた姿を想像すると、授業の度につい目頭が熱くなりました。又、教祖の周りの人の事も考えさせて頂きました。特に私は眞之亮様のお立場が強く心に残っています。天理教稿本教祖伝の最後の章「扉ひらいて」の教祖と人々の間に入って苦労された眞之亮様の事を思うと、当時の人々は本当に真剣に天理教の将来の事を考えられてたんだと思いました。そういった先人の方々の苦労の道があったお陰で今、こうして安心してお道の御用をつとめさせて頂いているんだと改めて感じさせて頂きました。大教会初代会長様であります上原さと様、お舅であった上原佐吉様の事も大教会史で学ばせて頂きました。大教会の歴史を学ばせて頂いた事で今後大教会、また上級教会の御用をしっかりとさせて頂こうと改めて思いました。その為には、まず自教会から。会長さんや奥さんを少しでも助けていければと思います。お道をもう一度深く見直させて頂きました。

二つ目に感じたことは、詰所の修養科の方の多くの人との出会いです。もし修養科へ志願してなかったら今回のように素晴らしい出会いはきっとなかったことでした。同じ笠岡の方とも詰所や大教会で会ってもあいさつを交わすぐらいだったでしょう。ただ、同じ屋根の下で三ヶ月過ごして本当に家族のような愛が生まれたんじゃないかと思っています。嬉しい時、楽しい時は一緒になって喜んでくれ、辛い時苦しい時は、真剣に話しを聞いて下さいました。時には自分の軽はずみな行動や発言で傷付けてしまいました。本当に迷惑かけてごめんなさい。親のように話を聞いて下さった教養の先生方。一ヶ月ごとに交代された助員の先生方はその時の自分に合った方を親神様が出会わせて下さったのだと思いました。三ヶ月間一緒だった森本先生には本当にたくさん大切なことを学ばせて頂きました。苦しい時も優しく接して頂き、親のように厳しくも接して頂きました。本当に良かったです。ありがとうございました。修養科生活三ヶ月間、無事に通らせて頂いた事を親神様、教祖に感謝します。この感謝の気持ちをいつまでも持ってお道の御用につとめさせて頂きます。ありがとうございました。最後に今回の修養科生活に関わって下さった多くの皆様のお陰で楽

しくも陽気に三ヶ月を終わらせて頂きました。本当にありがとうございました。

感謝の心

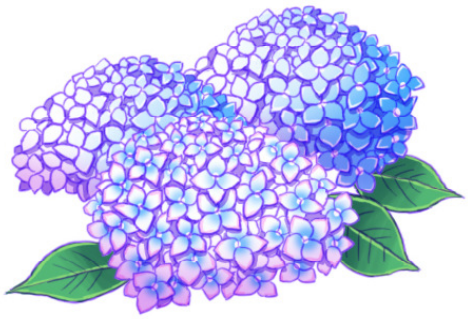
芦品分教会　中村真妃

私が修養科へ志願した理由は会長さんの薦めでした。最初はなかなか素直に受けとめる事が出来ず断っていたのですが、親から「会長さんが言ってる事は神様が口を通して言っている事だから素直に受けとめて行きなさい。」と言われたのがきっかけで、私はしぶしぶ修養科へ行くことを決意し、天理へお引き寄せ頂きました。最初は不安とホームシックでなかなか詰所の生活に慣れずごはんも喉を通りませんでした。でも時間が経つにつれ、徐々に詰所生活に慣れていき、他の修養科生とも溶け込んで詰所の生活が楽しくなりました。学校が始まり、私は一番組係と言う大きな役目を頂きました。今まで人の上に立つような立場を経験した事がない私にとって、クラスをまとめる事が出来るのか不安で仕方ありませんでした。でも、担任の増田先生や、クラスの人たちに恵まれて、支えてもらいながらこの三ヶ月間低い心で通らせて頂きました。上の立場に立つ事で、色々と見えてくる事があって、身上や事情で悩んでいる人があればすすんで声をかけ、おさづけをとりつがせてもらったり、人の喜ぶ姿を見たら同じように自分もうれしくなったり、ひのきしんではよろこびを感じながら進んで出来るようになりました。組係をやらせて頂いて、沢山の貴重な体験をさせて頂き、毎日が奇跡と感動の連続でした。担任の先生、教養掛の先生、笠岡の人達、クラスのみんな、本当に沢山の出会いがあり周りに恵まれて幸せでした。二ヶ月目では自分自身色々と見せて頂く事があり、沢山の方に迷惑をかけてしまって申し訳ない気持ちでいっぱいでした。でもその事を通して自分自身を見つめる事が出来、色んな事に気付く事ができました。修養科へ来るきっかけを下さった会長さんには、感謝の気持ちでいっぱいです。みんなのおかげで無事に笑顔で修了する事が出来ました。これからは周りの人達に恩返しできるように、ここで学んだ事をしっかり心に定めて、感謝の気持ちを忘れず日々通らせて頂こうと思います。この三ヶ月間携わって下さった皆さん、本当にありがとうございました。

本当にお世話になりました

鶴眞分教会　三輪篤子

私はこのたび天理に初めてまいりました。なにもわからない私は、まどいました。私が思って居た事と大きくちがいびっくりしました。それは広い広い天理教でした。詰所での生活、学校での生活なにもかも、わからない事ばかりでした。いちばんそばに居て下さった仲村さんでした。私もちょっと耳が遠くききにくいので仲村さんにはずいぶんと、お世話になりました。友達の末永さん、西村さん、谷本さん、丸山さん皆さんに大変良くして頂きほんとうにうれしく思いました。森本先生を初め一ヶ月目は竹本先生、二ヶ月目はさいが先生、三ヶ月目は渡邉先生と良い先生で大変よかったです。学校でも担任が増田先生、教祖伝の梶本先生、おてふりの佐津川先生ほんとうにお世話になりました。おぼえる事は出来ませんでしたが学校は休まずがんばるつもりでした。おかげ様で組の友達の人からも、毎日、こえをかけて下さってありがたく思って居ます。先生からおしえてもらった事は少しずつ思い出して仕事にはげみたいと思います。



こころの詩

▼天理教道友社発行『天理時報』、「時報歌壇」より転載

▽笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

6月1日付　海松ヶ岡分教会　藤井光子さん

はんなりと色染めつけし桜もち
食する人を想(おも)いつつ作り

芦品分教会　金谷眞佐代さん

母の日は花にしようか食べ物か
いろいろ悩むこれも楽しみ

福満分教会前会長夫人　福島悦子さん

失聴の五十年経し春の宵(よい)
彼の草笛聴きたくなった

▼養徳社発行『陽気』誌六月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「恩」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

佳詠　東悠分教会前会長夫人　田林美智子さん

天恩に感謝つきせぬ五体あり

▼表紙写真　（吉岡輝昭かさおか編集部員）

＜会 計 部＞

○６月は本年２回目の仕切り月です。

＜庶 務 部＞

○名称録の訂正について

作成中に出直した場合は空白となる。

○教人･よふぼく名簿の「出直し」処理について

所属教会･住所･氏名･年齢･出直し日を、庶務部まで連絡して下さい。

（専用の届け用紙はありません）

＜布 教 部＞

○本部食堂ひのきしん

期　間　　７月１６日（火）～３１日（水）
割　当　　福山ブロック

○直属ひのきしん特別隊

期　間　　７月１日（月）～２０日（土）
割　当　　上下･府中市ブロック

＜史 料 部＞

○７月２１日までに婦人おつとめ奉仕人の履歴を提出して下さい。

＜育 成 掛＞

○祭典後の神殿でのおさづけ取り次ぎ、会議室でのお話しについて信者さん方にお知らせ下さい。

○ようぼく勉強会の日程

	テーマ	担当者	（司会）
７月	おとまり会	中島誠治	（森本忠善）
８月	三日講習会	吉岡弘子	（門脇加津）
９月	にをいがけ	藤井正仁	（室　悦子）
１０月	十全の守護	三代温生	（門脇元教）
１１月	お休み	（海外布教推進講習会のため）	
１２月	徳づみ	中村　剛	（田中隆之）

※各月とも会場は、会議室にて午後１時１５分～２時。

＜詰所掛＞

○食堂･北東３階のエアコンを新設しました。

＜少年会＞

○こどもおぢばがえりについて

・教祖130年祭三年千日活動１年目の本年
　※全隊の帰参※初参加者の募集におつとめ下さい。
・帰参目標＝１，５００人
・詰所での模擬店開催日
　７月２７日、３０日、８月１日、３日

＜学生担当委員会＞

○学生生徒修養会･高校の部について

期　間　８月９日（金）～１５日（木）
受講費　８，０００円
※申し込み用紙は大教会神事所にあります。

＜登殿参列について＞

日　時　６月２６日
午前７時　おつとめ衣にて記念撮影
午前７時２０分　マイクロバスにて出発（第三御用場北側乗降場･車椅子は別）
※当日はおつとめ衣･下駄
※不都合が生じた場合、至急、吉岡誠一郎まで連絡

・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆　②教会・布教所の独自の活動の紹介　③俳句・和歌・川柳　④教会行事開催後の報告記事 等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は一句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：**tenkasa@yahoo.co.jp**
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

五月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原理一慎んで申し上げます
親神様の子供かわいい一条の尽きせぬ親心一杯の御守護によりまして 日々は結構に恙なく生活（くら）させて頂いております 分けても今は春の暖かさの中に夏の暑さを感じたり 山ではウグイスやホトトギスの鳴き声 又花はツツジからサツキへと替わり始め若葉青葉が眩しい等 五感を通して楽しみを与えて下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます
私共はより一層「かしものかりもの」の有難さを味わわせて頂き朝夕に御礼申し上げる事はもちろん 旬の御用とも相まって 普段にも増してたすけ一条の御用の上に勤め励まさせて頂いております その中にも今日の吉日は五月の月次祭を執り行う定めの日柄でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同 部内先々から集まりました七千六百九十五枚のおたすけ・お願いカードに込められた思いをしっかり受け止め たすけ心も一入に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめさせて頂きます 御前には今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し 同じ思いに伏し拝む状を御覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて先月二十九日の全教一斉ひのきしんデーには晴天の御守護を賜り誠に有難うございました お陰により多くの人々と共にひのきしんに汗を流させて頂く事が出来ました 又今月は直轄巡教をさせて頂きました 諭達巡教を受けてからの実動状況を確認させて頂きましたが 多くの人が諭達に込められた思いをしっかりと受け止め 歩みは遅いながらも確実に成人の歩みを進めていると感じ取ることが出来ると同時に受け止めれない人への丹精の必要性も感じさせて頂きました
又本日は祭典に引き続き縦の伝道講習会を開催させて頂きます 次代を担う子供達にお道の有難さや大切さを伝えることの重要性をしっかり勉強し 子供おぢば帰りや学生生徒修養会への参加呼び掛けに繋げていく所存でございます 更には又 今月二十五・二十六日と別席ひのきしん団参をさせて頂きます 笠岡に繋がる皆の年祭活動の一手一つの姿をご覧下さいまして事故怪我等のないようお連れ通りの程をお願い申し上げます
何卒親神様には 教祖百三十年祭に向け三年千日と仕切って成人の歩みを進める皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に親心一杯の自由の御守護を賜り この世は親神様の御守護の世界であり たすけたい一条の親心一杯の御守護である事に気付かせて頂いてご恩報じを願いたすけ一条に邁進する人が弥増して お望み下さる陽気ぐらしの世の状に一日も早く立て替わりますよう御守護お導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百七十六年 五月月次祭 祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	門脇元教
	杉原博之
講話	縦の伝道講習会
七月講話	佐藤道孝
賛者	中村道徳
	佐藤真孝
指図方	佐藤道孝

役割＼区分	坐り勤	前半	後半
地方	佐藤道孝	吉岡壽	中村邦義
	田中隆之	上原志郎	門脇元教
	横山逸郎	高木昭祥	中村道徳
おつとめをどり	大教会長様	中村剛	岡崎和夫
	岡本久善	岡崎真一	谷内伸自
	上原繁道	杉原博之	三島渉
	大教会奥様	武内正美	門脇加津
	田中ますみ	内海安子	高木孝子
	門脇郁子	笹尾一美	中村初美
笛	山野弘実	武内清明	佐藤真孝
ちゃんぽん	笹尾正治	赤木素志	田林久嗣
拍子木	河原節喜	岡崎輝彦	内海史郎
太鼓	中島誠治	吉岡誠一郎	渡邉隆夫
すりがね	中村義太郎	山田敏教	虫明立生
小鼓	上原浩	淺野明教	岡崎真一
琴	虫明好美	佐藤香苗	谷内美知子
三味線	上原順子	森本冨美子	横山小智榮
胡弓	今川佐智子	岡崎豊子	三島照美

◎追加の諭達巡教

それぞれの教会で開催された諭達巡教を受けることの出来なかった方々に対して、左記の通り、追加の諭達巡教が開催されました。

▼会場　笠岡詰所
日時　5月19日　午前10時～11時45分
講師　上原繁道
参加者　38人

▼会場　米府分教会（米子市）
日時　5月19日　午前10時～12時
講師　武内正美
参加者　30人

▼会場　東悠分教会（町田市）
日時　5月19日　午前10時～12時
講師　佐藤道孝
参加者　16人

▼会場　笠岡大教会
日時　6月2日　午前10時～12時30分
講師　大教会長様
参加者　55人

※お詫びと訂正

本年5月21日発行の『かさおか第52巻第5号』15ページ掲載の「大教会だより」立教176年4月21日付登用の辞令の記事において、左記の方々のお名前が抜けておりました。

読者の皆様ならびに関係者の皆様にご迷惑をお掛けしましたことをお詫びするとともに、ここに訂正させて頂きます。

＝辞令＝

立教176年4月21日付

◎登用

准承事　渡邉隆夫
〃　佐藤真孝

大教会だより

◎第八六三期修養科

自　立教176年3月1日
至　立教176年5月27日

＊教養掛

三ヶ月間　森本忠善（大教会准承事・海松ヶ岡分教会長）

一ヶ月目　竹本和道（福芦分教会長）
二ヶ月目　雑賀元生（照雲分教会長）
三ヶ月目　渡邉泰造（品治分教会長）

＊修了者

八尋末永裕
三群谷本裕太
瑞雲西村靖彦
木津和丸山優樹
芦品中村真妃
鶴真三輪篤子

◎教人資格講習会修了者

立教176年6月10日終講
陶山上原宏恵

◎教会長資格検定講習会修了者

立教176年6月19日終講
陶山上原繁次

◎第八六三期修養科一期講師

自　立教176年3月1日
至　立教176年5月27日
金浦今川昌彦

◎直属ひのきしん特別隊

自　立教176年6月1日
至　立教176年6月20日
三郡谷本裕太

訃報

重政禎子さん

仲條分教会長
5月22日出直されました。
享年　55才

鳥取砂の美術館

過日、所用で出掛けて通りすがりに目に入ったので立ち寄ることにした。GWの最中、駐車場も食堂も何処も人だらけ。その砂の像は雄大で見る人々を圧倒し、また微細な彫刻の技法に歓喜の声援を送るのであります。

荘厳な雰囲気の建物像と植物の表現は砂と云うより木彫刻にさえ見えます。人の顔の表情は「其処に居る」と感じるほどの視線が不思議な世界へ誘えるのでしょう。制作の過程も開示してあり、型固剤など一切使わず「砂丘の砂とそこの海水」のみで、大きな型枠に砂と海水を入れて上から填圧を掛ける事を繰り返し目的の大きさに固めるのです。当分の間乾燥させてから、作者が独自に作った鏝（こて）やヘラで削り取りながら造形を作り出して行くのです。海内外からの老若男女問わず専門家等で「東南アジア」を模倣して来年の1月5日まで展示されています。

「砂上の楼閣蟻の一穴から」とてもそんな事では崩れないし、雨でも風でも・・・2～3年持つ代物。実際に外の園亭には小型の作像が並んでいて、その表情が心を癒してくれます。親神様は人間が陽気暮らしする為に全ての物を創られた。それを使いこなす、考え出すのが「英知を集める人間」であり、創意工夫から始まる結果が造形物。

教祖130年祭に向かい「創意工夫」をこらし盛り上がりを企する時であり、造り出す時であるのです。小心者の私は、今・・・実動が伴わないジレンマに地団太を踏みながら、創意工夫から、「おつとめ奉仕者」の結果を出すには一念通天！「にをいがけ」「おたすけ」の実動あるのみなのです。

（に）